

1 週間の実習を通して感じたこと、考えたこと

手塚 雄大

夏期休業のCBLに引き続き、1月29日から2月2日までの5日間、うりずん、ひばりクリニックにて実習させていただいて、今回の実習も前回と同様に気付きの多い貴重な体験をすることができました。特に、水曜日を除いた4日間毎日実習させていただいた児童発達支援では、痰の吸引や経管栄養を見学したり、利用している子ども達と一緒に体操をしたり、節分のレクリエーションをしたりと、非常に貴重な体験をさせていただきました。その中でも、オムツ交換や水分補給の介助（水分にとろみをつけてスプーンで子どもの口へ運ぶこと）を実際にサポートさせていただいたことは、初めての経験であり、見学している時は容易そうに見えることでも、いざ実行してみると非常に難しいということ、身をもって体験することができました。

日中一時支援では、自分自身が実際に介護用リフトに乗る体験をさせて頂いたことがとても印象に残っています。リフト離陸時はとても恐怖心があったのですが、一度離陸してしまうと乗り心地は悪くなく、遊園地のアトラクションのような感覚であることが実際に乗る体験をしたことで知ることができました。また、リフトに乗る際には、腰や腕等自分自身の安全を確保するのも重要であることを学び、実際にやってみないと気付かないことがたくさんあるなと感じることができました。

水曜日に、訪問看護ステーション星ヶ丘、沼尾病院にて実習させていただいた際は、訪問看護に同行することが今回初めてでありとても新鮮でした。「現在の生活で困っていることはありませんか？」等と看護師の方が質問なさっていたように、医師が行う訪問診療よりもより患者さんの日常生活のサポートをする役割が大きいと感じました。また、訪問時は自分が医学生であることをあえて名乗らなかったのですが、話途中に自己紹介をした後から、「将来、先生になられる人なのですか！」と言われ、患者さんが余所行きの態度をとるようになったことは、やはりまだまだ地域では、医師は“お医者様”であるのだな、と痛感させられる場面がありました。個人的には、住民、ご利用様の方の皆さんの心の中にあるバリアのようなものを取り払うまではいかなくとも、すり抜けられるような医師になりたい、と強く思うようになりました。

また、移動支援、放課後等デイサービスの際に感じたことなのですが、家族やスタッフといったご利用様(患者さん)を見守る人がいないと、子どもたちは車移動が難しいという実情を知りました。一刻も早く、医療的ケアのできるスタッフの確保と教育の充実が求められると思ったのですが、個人の尽力のみでは限界があり、やはり行政等を巻き込んで少しずつ社会を変えていかなければ改善は期待できないのかな、とも同時に思いました。

実習全体を通して、疾患だけをみるのではなく、患者さんを診ること、さらにその家族、地域、社会問題にも気を配れるようになることが、将来地域で働く上でとても重要になってくると感じました。介護を必要とする高齢者の方々が自宅で療養されたり、医療的ケアが必要な心身に障がいを持った子ども達が自宅で生活したりするためには、家族の協力が必要なのはもちろん、そうした家族をサポートする地域制度や支援体制が整わなければ、継続して暮らしていくことは困難であるように思います。私は、患者さんとその家族、そして地域を包括的にみることができるような医師に将来なりたいです。

結びに、高橋先生をはじめ、ひばりクリニック、うりずん、訪問看護ステーション星ヶ丘の皆様には大変お世話になりました。この場をお借りして、お礼申し上げます。5日間本当にありがとうございました。